

貧しさが宗教の命

過つて愛児を溺死できさせてしまった若い母は、子の供養のため属していた教団に五十万円をささげた。教団は「こんなはした金で子供が天国に救われると思うのか」と、さらにその母を打ちのめした。―身辺にあつた話。

宗教にとって最大の敵は、金を集め、権力にすりよる腐敗である。道元禪師は教団が大きくなるにつれ、この二大悪をさけるため、京を去つて越前、今の永平寺に移つて道を修めた。時の幕府（北条時頼）の懇請こんせいも拒否、時頼からの土地寄付状を喜んでもらつて来た弟子玄明を追放し、玄明の坐禅定席の床板をはぎとり、直下の土七尺も掘り捨てさせた。情に熱い師であつたが、金と権勢に対してはかくわが身を正さねば法燈を守れないと信じていたからである。（「正法眼藏随聞記」）。

同じころ（十三世紀）、イタリア・アッシジの聖フランチェスコの周りに、小鳥たちも集まつて師の話の話を聞くという優しさの極みであつた。「必要をこえたお布施や貧しい者から金を頂くのは盗人だ」と常に弟子を厳しく戒めいまし、わが身を正していた。

だれかが僧堂横の十字架に供えた金を僧がうっかり院内の窓に投げ入れた。怒ったフランチェスコは彼に金をくわえさせて同じようにその窓から出て、路上の驢馬ろばの糞かんの上に置かさせた。「金を嫌うこと驢馬の糞よりも甚はなはだし」(「フランチェスコの完全の鑑かがみ」)

巨費をあくなく集めるために殺人し、武装権力化をめざすオウム教には宗教のカケラもない。

(一九九五年七月五日)